



# 血の道



川崎ゆきお

「こう暑いと、何かをする気がしません」

「夏はねえ、だから、夏休みがある」

「もう学校へ行ってませんからそんな休みはありません」

「今、何を」

「ぶらっとしています」

「休んでいると」

「あ、はい」

「じゃ、やることなんて、最初からないでしょ。それに長い夏休みを過ごしているようなもので」

「休んでいるのではなく、自分の仕事を見付けるため、または自分を見つめ直すため、更新中なのです」

「あ、そう」

「しかし、こう暑いと、何もできません」

「何もしなくてもいいのでは」

「いや、それなら、ただ単にサボっているだけになります」

「就職活動とかは」

「それ以前に、自分の適性を考えたりしています。思っている以上に適性が違っていたりします。やりたいことと、できることが違っていたり」

「まだ、そんなところにとどまっているのですか」

「ここは大事ですから」

「さらにそれ以前もありますか」

「以前」

「適性を考える以前です」

「ああ、それは何かしないと食べていけないので、仕事をする。その仕事は合っていないとやめてしまう。だから、周囲に迷惑がかかるので、適正な仕事を選ぶ。その適正を探しているのです」

「じゃ、仕事探しですね」

「そうです」

「それ以前となると、何故仕事をしないといけないかでしょ」

「はい。それは食べていくためです。生活のため、将来のためです」

「仕事の内容は」

「それはまあ、適当でいいです」

「じゃ、仮に働かなくてもよい状態なら、仕事をする必要はないでしょ」

「それは有り得ません」

「あ、そう。でも、仮にです」

「もしそんな恵まれた環境なら、仕事などしません。ずっと遊んでいます」

「それは私が今やっていることです」

「ああ、羨ましい」

「ところが、あなたと同じで、やることがない。暑いと何もやる気が起きない。それに、好きなことなんて、すぐに賞味期限が来ますよね。それなら、あくせくと働いていた方が、持ちがいいです」

「持ち？」

「間が持ちます。一日が忙しく過ぎ去ります」

「しかし、それはやりたくてやっていることじゃないので」

「本当にやりたいことなんて、幻のようなものでしたよ」

「羨ましい限りです。贅沢な悩みです」

「それで、あなたの長い休憩はいつ終わるのですか」

「まだ続きます。まだ、何も決まっていないので」

「その間の収入は」

「何とかあります」

「じゃ、そんなに切羽詰まった暮らしじゃない」

「ああ、一応働いていましたから」

「ほう」

「その収入がまだ入って来ますので」

「何ですか、それは」

「いや、大した金額じゃないです。それもすぐに止まるので、それまでの間に、何とか仕事を見付けたいと思っています。でも暑いので、やる気が消えてしまいました。これは秋からにします

」

「何かよく分かりませんが、仕事を選びたいということですか」

「はい、適職を」

「まあ、いい身分だということでしょ」

「いえいえ」

「私は働かなくてもいいのですが、健康を害しましてねえ。何をするにしても体力が続かないし、症状がすぐに出る。それで、何もできないのですよ」

「そうなんですか、そのようには見えませんが」

「さらに暑いので、何もできない。だから、暑いのは歓迎なんです。この時期、何もしなくてもいいんだと思うとね」

「そんなに悪いのですか」

「血を求めているだけです。血さえあれば元気になります」

「えっ」

「それを我慢しています。迷惑がかかるのでね」

「血、血ですか。輸血が必要なのですか」

「直接のね」

了